

様式6（第15条第1項関係）

平成30年4月6日

独立行政法人 日本学術振興会理事長 殿	研究機関の設置者の 所在地	〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8	
	研究機関の設置者の 名称	国立大学法人東京芸術大学	
	代表者の職名・氏名	学長 澤 和樹 (記名押印)	
	代表研究機関名 及び機関コード	東京芸術大学	12606

平成29年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金  
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2802	補助事業の 完了日	平成30年3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	美学・芸術諸学 3001
補助事業名（採択年度） マルチメディア・コンテンツに関する領域融合・実践型 国際研究ネットワーク形成（平成28年度）				補助金支出額（別紙のとおり） 37,630,000 円	
代表研究機関以外の協力機関 なし					
海外の連携機関 Univ. Paris-Sorbonne, Stanford University, National Film Board of Canada, New York University, Harvard University					
1. 事業実施主体					
フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野	
主担当研究者 ニシオキ リツヒコ 西岡龍彦	東京芸術大学	音楽研究科	教授	作曲、電子音響学	
担当研究者 フクナカ フユコ 福中 冬子	東京芸術大学	音楽研究科	准教授	音楽学、音楽美学	
ゴトウスグル 後藤 英	東京芸術大学	音楽研究科	准教授	作曲、メディアアート	
オカモト ミツコ 岡本 美津子	東京芸術大学	映像研究科	教授	映像メディア学、 制作論	
ヤマムラ コウジ 山村 浩二	東京芸術大学	映像研究科	教授	映像創造表現	
フヤマ 布山 タルト	東京芸術大学	映像研究科	教授	映像理論研究	
計6名					

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先（電話番号、e-mailアドレス）
マツムラ ハナエ 松村 英恵	国際企画課国際交流係・係長	050-5525-2786 <a href="mailto:intl-tua@ml.geidai.ac.jp">intl-tua@ml.geidai.ac.jp</a>

※2頁以降は、交付決定を受けた時点の事業計画の項目に合わせて必要に応じて修正すること。

## 2. 本年度の実績概要

東京藝術大学の研究課題である「マルチメディア・コンテンツに関する領域融合型の実践的な国際共同研究を推進するための国際ネットワーク構築」に向けて、昨年度はその準備・調査を重点においたが、今年度はこれまでに構築してきたネットワークによる共同研究の成果をシンポジウムや作品発表として具体的に提示することができた。今後さらにメディア・コンテンツとして発展が予想される VR/AR と、それに最も親和性の高い音響システム Ambisonic へと研究領域を広げた。継続的に研究成果を公開し活用できるように Web サイトを立ち上げた。

(1) これまでの研究成果発表と今後の研究課題の方向性の確認のために、「ミュージック・テクノロジーとメディア・アート～創作と研究の交差点～」をテーマとして 11 月 23 日、本学千住校地スタジオ A で国際的なシンポジウム開催した。シンポジウムに先立って、特別講演としてメディア・アートの領域で最先端の研究である「Virtual Reality」と「Device Art」について、岩田洋夫筑波大学システム情報系教授による特別講演を実施した。映像と音響の研究実践として、スタンフォード大学准教授ヤロスラフ・カプチンスキによる自作「Mondrian Variation」「United」を例にした分析とマルチチャンネルスピーカーシステムの音響を伴った映像作品の上演を行った。

シンポジウムは、司会を本学研究担当者福中冬子（本学音楽学部楽理科教授）、登壇者として、マルク・バティエ（パリ第 4 大学名誉教授 音楽学・作曲）ヤロスラフ・カプチンスキ（スタンフォード大学准教授 作曲）、フレデリック・ベビラクア（IRCAM 研究者）、マラル・モハマディアン（NFB プロデューサー）というそれぞれの領域を代表する研究者、作家を招聘し、本学担当研究者、後藤 英（本学音楽学部音楽環境創造科准教授 作曲家 メディアアーティスト）も参加して、ミュージック・テクノロジーとメディア・アートについての研究と創作の諸問題について討議を行った。

(2) 主担当研究者西岡とバティエ教授は共同研究「22.2 マルチチャンネル音響システムとマルチチャンネルのその他のフォーマットによる音響表現の比較研究」を続けてきたが、シンポジウムと同日にスタジオ B で、マルク・バティエ作曲「In the Painter' Studio」、西岡龍彦作曲「天平乱声～オーケストラのためのポストリユード～」を 22.2 マルチチャンネル音響システムで発表した。

(3) ソルボンヌ大学、スタンフォード大学、ニューヨーク大学に若手研究者を派遣し、別紙のとおり順調な研究成果をあげている。本年度の目標であった「創作系の若手研究者による派遣先研究者との連携のマルチメディア・コンテンツの創作プロジェクト」がスタンフォード大学で実現し、4 月 19 日・20 日にスタンフォードの Bing コンサートホールでのコンサートが予定されている。

(4) 音楽と映像等の芸術諸領域を融合し、創作と研究を有機的に連関した新たな実践的メディア研究のために、22.2 マルチチャンネル音響システム作品 10 本を創作した。来年度には、これらの音響作品を元にアニメーションを中心としたマルチメディア作品として完成させる。

### 3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

国際ネットワークの構築と共同研究、実践的メディア研究、それらの本年度時点での成果発表が予想以上に実現できた。特に、11月に開催した国際シンポジウムの成功は、さまざまな専門領域の研究者と創作者が、領域を超えて有機的に連携・融合することで新たな実践へと発展させることができるという大きな自信に繋がった。

本事業の昨年度に立てた目標の「データベースの構築作業」は、本事業が領域横断型研究であることからマルチメディアの新たな理論的枠組みの提示が必要であり、「データベースの運用（公開方法、著作権などの公開の条件に関する検証）」と合わせて遅れを取り戻すことに努めなければならない。

スタンフォード大学、ソルボンヌ大学、ニューヨーク大学への若手研究者の研究活動は活発で、受け入れ研究者からも大きな成果をあげていることが報告されている。本年度にカナダ国立映画制作庁（NFB）へ派遣予定であった若手研究者については、NFBが独自の制作プログラムを持ち、本事業による若手研究者受け入れについてNFBによる人選を強く希望してきたことから、NFBからの研究者招へいについては予定どおり行いつつ、予定していた若手研究者派遣を見直し、平成30年度より松浦昇（本学非常勤講師）を映像研究分野として世界的な権威であるハーバード大学に派遣することとした。受け入れ研究者であるユキオ・リピット教授は、現在アメリカの日本美術史界で研究の最先端を行く人物として知られ、単著が様々な賞を受賞するなど国際的な評価も高いことから、松浦の研究にとって最適の研究室である。また、若手派遣研究者平野貴俊の派遣を取り消し、後任者（平成30年度ニューヨーク大学派遣）を選抜した。これらの若手派遣研究者の変更による研究計画全体への影響はない。

若手研究者派遣の変更や「データベースの構築作業」の遅れはあるものの、本事業全体としては順調な成果をあげている。

### 4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

#### ①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。） ・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・著者名について、責任著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には <u>二重下線</u> 、担当研究者については <u>下線</u> 、若手研究者については <u>波線</u> を付してください。 ・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付してください。また、主要連携研究者については <u>斜体・太下線</u> 、連携研究者については <u>斜体・破線</u> としてください。	
1	<u>Fuyuko Fukunaka</u> , “World Music History and Interculturality: Toward Recontextualizing Post-War Japanese Avant-Garde Music,” in Aesthetics of Interculturality in East Asian Contemporary Music. The World Music (New Series), Vol. 6, no.1 (Dec. 2017): 59-72.
2	<u>Ai Higashikawa</u> , Conception musicale et enjeux esthétiques dans les relations entre les écritures instrumentale et électroacoustique chez Pierre Boulez, Ph. D. Dissertation, Sorbonne Université, March 2018.
3	
4	

5	
---	--

## ②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、責任発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。</li> <li>・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。</li> <li>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</li> <li>・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。</li> </ul>	
1	Fuyuko Fukunaka, “Multi-Culturalization of Contemporary Japanese Music (Or: Japase Composers, Japanese Authenticity,” Keynote Lecture, Music from Japan, The Scandinavian House, New York, USA, Feb. 18, 2017.
2	<u>福中冬子</u> (企画・制作)、「ストラヴィンスキー《マヴラ》」、『京都賞記念ワークショップ in 東京』、東京芸術大学 6 ホール、2017 年 11 月 12 日。
3	<u>福中冬子</u> 「音楽史記述は何故に尹伊桑を必要としたか」、『尹伊桑記念シンポジウム』、於：東京大学駒場キャンパス、2017 年 11 月 18 日。
4	Fuyuko Fukunaka, “Constructing Japan’s Postwar Western Music through Remaking the Past, and the Present,” Invited Lecture, National Chiao-Tung University (Taiwan), Dec. 6, 2017, and National Taiwan University, Dec. 8, 2017.
5	研究成果としての作品発表 <u>後藤英</u> 作品名「Body in zero G (作曲、VR/AR とプロジェクション・マッピング、ダンス)」、 発表会場：東京芸術大学、千住校地、第 7 ホール 発表年月日：2017 年 12 月 16 日
6	IRCAM フォーラム (コンピューター音楽に関する国際学会) <u>後藤英</u> 日時：2018 年 3 月 18 日 場所：パリ、IRCAM 発表タイトル：Virtual Musical Instrument - Its evolution with an application of Virtual Reality and Augmented Reality
◎ 7	<u>マルク・バティエ</u> 作曲「In the Painter’ Studio」22.2 マルチチャンネル音響システム・リミックスによる 発表会場：東京芸術大学、千住校地、スタジオ B 発表年月日：2017 年 11 月 23 日
◎ 8	<u>西岡龍彦</u> 作曲「天平乱声～オーケストラのためのポストリユード～」22.2 マルチチャンネル音響システム 発表会場：東京芸術大学、千住校地、スタジオ B 発表年月日：2017 年 11 月 23 日
◎ 9	<u>オロスラフ・カプチンスキ</u> 作曲「Mondrian Variation」 「United」映像とマルチチャンネル音響 発表会場：東京芸術大学、千住校地、スタジオ A 発表年月日：2017 年 11 月 23 日

## 5. 若手研究者の派遣実績（計画）

### 【海外派遣実績（計画）】

年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	合計
派遣人数	1 人	4 人 ( 0 人)	4 人 ( 3 人)	5 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

### 【本年度の海外派遣実績】

#### 派遣者②の氏名・職名：東川愛 専門研究員

マルク・バティエ教授のガイダンスのもと、戦後ヨーロッパ（とくにフランス）におけるマルチメディア音楽作品の創作史、上演史、受容史を包括的に研究した。とりわけ、マルチメディア作品の「音符」以外の要素（変調やパッチなどのプログラミングや上演形態）のドキュメンテーション上の問題については、戦後フランスを代表する作曲家、ピエール・ブーレーズのミクスト作品の創作と上演を例として、一次資料（スケッチ等の資料および録音）から創作プロセスの再構築を行い、検証におけるプロトタイプを提示した。この研究の一部は、派遣者がパリ第4大学に提出した博士論文の一部として採用された。

またそれと並行して、電子音響音楽、マルチ・メディア音楽創作領域において世界を代表する研究機関であるパリ IRCAM の研修に参加し、現在どのようなテクノロジーがリアルタイムに研究され、どのような作品が創作されているのか、より実地面から検証した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
フランス、ソルボンヌ大学、音楽学研究所、マルク・バティエ教授	0 日	340 日	0 日	340 日

#### 派遣者⑤の氏名・職名：余田有希子 非常勤講師

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)  
**スタンフォード大学音楽学部 CCRMA における、マルチメディア作品への活用のためのマルチチャンネル音響の研究と実践**  
 CCRMA では、8ch、22.2ch、56.8ch など各種のマルチチャンネルシステムのスタジオが非常に充実しており、研究や創作が盛んに行われている。各 IT 企業が総力をあげて取り組む課題の一つである VR のサウンド制作のために Ambisonic への注目が高まっていることから、それらのスタジオを用いて Ambisonic 用のマイクやサウンドシステムのあり方、音響・音楽の制作方法、エンコードやデコードのあり方など CCRMA においても様々な視点から研究が進められている。このような環境下において、Ambisonic を用いたサウンド制作の最前線の情報を取得しながら、作曲家としての視点からその音楽表現や音響表現、制作方法について研究することが役割である。

(具体的な成果)

① 8ch 作品の制作 作品名『reflection』

<制作方法>

メインワークステーションとして REAPER を用いた。その理由としては、サードパーティーである ATK の開発した優秀な Ambisonic のプラグインが使えることが挙げられる。特定の音源を特定のスピーカーから点音源として発音させたい場合は、それらを各 ch にアサインした 8 つのモノラルトラックに配置し、Ambisonic ツールを使用してスペーシャライズを行いたい音源は、ATK FOA Transform FocusPresPushZoom を挿入したトラックに配置し、点移動、線移動、空間移動の 3 種の音源の移動を用いた作品を制作した。

② 22.2ch 作品の制作 作品名『sunset』

CCRMA の 22.2ch システムは、上層 7 ch、中層 8 ch、下層 7ch で構築されており、このうち下層 7ch のスピーカーは音の透過が可能な格子で覆われた地下に設置されている。22.2ch システムのスタジオにおいては、CCRMA のテクカルエンジニアである Fernando Lopez-Lezcano の発案・構築による Openmixer がメインミキサーとして設置されており、自身の PC を利用した制作を行う場合、あらかじめ Jack にて PC 上に 22.2ch 対応のインプット、アウトプットを構築し、それらを Netjack 経由で接続しながら DAW を稼働させる必要がある。その際、利用可能な DAW の一つである Ardour をメインワークステーションとして使用した。

なお、Ambisonic のプラグインとして ambiX を挿入した。

中層(ear level)を地平線と見立て、Ambisonic ツールにてスペーシャライズしながら夕日の沈む様子の表現を試みた。

2 つの異なる環境での制作を通して、各プラグインの特徴やそれに応じた制作方法、また Ambisonic ツールを使った制作におけるメリット・デメリットを考慮した作品構築の方法を習得することができた。

今後の展望としては、56.8ch 環境下での再生、ステレオへのデコードにおける問題点の研究が挙げられる。

尚、①の『reflection』は、4月19日・20日にスタンフォード大学内の Bing コンサートホールにて行われるマルチチャンネル音響作品のコンサートにて上演予定である。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
アメリカ、スタンフォード大学、CCRMA Jaroslaw Kapuscinski 准教授	0 日	212 日	153 日	365 日

派遣者⑦の氏名・職名：高橋智子 特任助教

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

受け入れ研究者のホフマン教授のガイダンスのもと、ニューヨーク在住のマルチメディア作品創作者複数人へのインタビューを行ったほか、そうした作品の演奏会等に赴き、どのような作品がどのような上演形態を意図して創作されているか調査した。またアメリカにおけるマルチメディア系（ダンス、映像との融合）の創作の先駆者のひとりであるラ・モンテ・ヤング氏へのインタビューも予定している。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
アメリカ、ニューヨーク大学 (NYU) 音楽学部、エリザベス・ホフマン教授	0 日	61 日	249 日	310 日

派遣者⑨の氏名・職名：西岡瞳 専門研究員

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

梵鐘及び西洋の鐘の音響解析を通して、日本固有の響きとはどんなものか、そしてそれを独自の作曲技法に落とし込んで、ジャパンオリジナルな音響効果を持つ作品を創造することを試みる。そのような音響が、日本のアイデンティティを文化的価値にまで高め発信するための方法論を構築する。日本独自の音響を感覚的および科学的な両面のアプローチを以て国際的なマルチメディア作品への応用に貢献できる研究を行う。

(具体的な成果)

梵鐘音に対する比較対照研究として進めている西洋の鐘の音の音響解析を作品に応用する成果として、カリヨンの研究にも着手し、カリヨン演奏家 Julie Zhu によって St. Thomas Church で自作品が初演された。

Hitomi NISHIOKA, 《 A piece of Carillon 》,

Julie Zhu, St. Thomas Church, New York, 3/11/2018

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
アメリカ、ニューヨーク大学 (NYU) Steinhardt School of Culture, Education, and Human Development、Robert Rowe 教授	0 日	104 日	196 日	300 日

※本年度の派遣者毎に作成すること。

6. 研究者の招へい実績 (計画)

【招へい実績 (計画)】

年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	合計
招へい人数	2 人	4 人 ( 1 人)	7 人 ( 4 人)	8 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の招へい実績】

招へい者②の氏名・職名：マルク・バティエ パリ第4大学音楽学研究所教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

本事業の海外主連携研究者、若手研究者東川愛の受け入れ、研究指導。

環境的要因が創作傾向を強く支配するといえる音楽マルチメディア領域において、どのようなトランスナショナリティがどのような経緯で生じ、そしてそれがどのように創作地政学に作用したのかを包括的に検証する。「マルチメディアにおける高臨場感マルチチャンネル音響システム」で、東京とパリのスタジオでの実践的な制作を通じて作品発表と検証を行った。

(具体的な成果)

平成29年11月23日、東京藝術大学音楽学部千住校地スタジオAにおいて、本事業の成果発表として「ミュージック・テクノロジーとメディアアート」というテーマのシンポジウムで登壇。また、バティエ教授の8ch.電子音楽作品「In the Painter's Studio」を22.2マルチチャンネル音響システムにアップコンバートすることで、どのように音響的な表現の可能性が拡張されるかという研究発表を東京藝術大学千住校地スタジオBで行った。その後、共同研究・共同制作の検証と最終的な作品完成のためのリミックスの方法論について討議を重ね、マルチメディア作品の中で新たな音響システムがどのような役割を果たすかについての大きな成果が得られた。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成28年度	平成29年度	平成30年度	
パリ第4大学音楽学研究所、フランス 西岡龍彦（東京藝術大学）	13日	10日	10日	33日

招へい者③の氏名・職名：ヤロスラフ・カプチンスキ スタンフォード大学准教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

本事業の海外主連携研究者、若手研究者派遣事業：余田有希子の受け入れ、研究と創作の指導。

マルチメディア音楽の播種のメカニズムを巡る検証のアプローチとマルチメディアを使った素材を楽器により制御する作品の創作技法の研究。

(具体的な成果)

平成29年11月23日、東京藝術大学音楽学部千住校地スタジオAにおいて、「ミュージック・テクノロジーとメディアアート」というテーマのシンポジウムで登壇。また、マルチメディアの自作品「Mondrian Variation」と「United」の作品分析を行う。マルチメディア作品におけるマルチスピーカーシステム音響のプログラム開発。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成28年度	平成29年度	平成30年度	
スタンフォード大学音楽学部、アメリカ 西岡龍彦（東京藝術大学）	0日	10日	20日	30日



招へい者⑦の氏名・職名：ロバート・ロウ ニューヨーク大学教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

本事業の海外連携研究者、若手研究者派遣事業：西岡瞳の受け入れ、研究と創作の指導。ライブ・エレクトロニクスミュージックとマルチチャンネル音響システムの共同研究。特に、楽器音の音響的特性をマルチチャンネル音響システムの再生時の効果についての研究、日本の伝統楽器による音響作品、22.2 マルチチャンネル音響システムの制作指導を行う。

(具体的な成果)

22.2 マルチチャンネル音響システムと映像（アニメーション）との新たな表現の可能性についての作品制作のために、東京藝術大学音楽学部千住校地でレクチャーとディスカッションを行った。これは、東京藝術大学映像研究科との共同制作（プレスコア作品）として音響と映像の関係性（スピーカー配置の低層、中層、高層や、前方、左右、後方、天井などの方向性と視覚の関係など）をテーマに、10の音響作品を作る企画の完成度を大きく上げることに繋がった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
ニューヨーク大学 Steinhardt School of Culture, Education, and Human Development アメリカ 西岡龍彦（東京藝術大学）	0 日	11 日	10 日	21 日

招へい者⑨の氏名・職名：マラル・モハマディアン カナダ映画制作庁 プロデューサー

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

商業的価値観による裏打ちに依存しない作品制作を、最新映像技術を視野に入れ、カナダ映画制作庁にて指揮するモハマディアン氏に、日本にて制作するマルチメディア・コンテンツの監修を依頼した。

(具体的な成果)

平成 29 年 11 月 23 日、東京藝術大学音楽学部千住校地スタジオ A において、本事業の成果発表として「ミュージック・テクノロジーとメディアアート」というテーマのシンポジウムで登壇。

シンポジウム後も引き続き、日本側研究者と情報交換を行い、マルチメディアに関する先見的・実践的事例に基づき、アートとテクノロジーについての考察作業を行った。

また、平成 30 年 3 月 6 日から 10 日まで横浜市にある東京藝術大学大学院映像研究科万国橋校舎において、本学アニメーション専攻教員と、今後の研究内容及び創作の具体的内容について議論した。本頭脳循環の主要研究テーマの一つである音楽・映像領域を横断する作品について、実際の事例を交えながら議論し、今後マルチメディア・コンテンツの中で、アニメーション作品がどのような役割と可能性を持つかについての意見交換を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
国立映画制作庁（NFB）映画制作部、カナダ 岡本美津子（東京藝術大学）	0 日	12 日	14 日	26 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

## 7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。